



用紙に記入するのに、立ったままお書きなさいという例の「記帳台」というものがある、お役所や銀行でよく見る台だ。これはほんとに失礼千万、簡単な記帳ならいいが、免許証について言うならば、最近はものすごい桁数の番号・数字だ。ごく普通の体力の私でさえ立ったまま記帳というのにはかなりの抵抗がある、ましていわんや、まだまだ多くのお年寄りや弱者がいるはずである。ついでに言わしてもらえれば、たかが「更新」である。変わった事項の無い人は何も書かなくて済むような簡便なシステムにしないさ……と言いたい。

何かを「書かせる、印判を押させる」と言うのがどうもお役所行政の基本のようだが、困ったことだ。

それはさておき、あの失礼極まる「立ったまま書きなさい台」に以前から大いに疑問があったものだから、事前に用紙をもらいに行った。自分の家の机でゆっくりと、間違いの無い様に、そしてせっかくならきれいに書こうと思ったからだ。ところがなんとそれはだめだと言う、曰く、「証紙」が貼ってあるから、と言うではないか。冗談じゃない、事前に貼ったのは自分たちお役所のほうではないのか。

記帳台にしろ、証紙にしろ、おそらく彼らの仕事の進め方は「昔からそうなっている」という固定的なイメージが唯一の仕事の進め方の基本ではないかと想像する。今、民間の企業は、いかにしてお客さんに喜んでもらえるか、日々ものすごい努力と競争をしている。

お役所の場合は、喜ばしてまでしてもらわなくてもいいが、せめて市民の立場に立って考えてもらいたい。いわゆる「市民サービス」という概念である。

それに前々から不審に思っていることだが得体の知れない「交通安全協会」に入りなさい、と言う。それでなくてもお役所の外郭団体の存在に大いに疑問を持っている。そういった機能を持った団体が必要でないと言うわけでは無い、要するにお役所主導、役人の出向の場であつてはならないと言うことだ。民間の新しい智恵と努力を導入しなければならぬ。何とか民間主導にならないものか。 といったところで、せっかくのご勧誘であつたがお断りさせてもらった。

さて、最後に視力検査がある。過去何度も経験していて今までは特に何も感じなかったのだが、この度は年令のせいか、それとも「何とか協会」に入会しなかったせいか、この視力検査をパスできなかった。視力が弱くなっているのは、これは私のせいだから誰にも文句は言えない、5万円かけて眼鏡の作り直しだ。それはしょうがないとして、この視力検査もお役所本位のペースも甚だしい。「視力が弱い、良く見えない」…といった、当の本人にとってはいささか恥ずかしい個人的・肉体的なことを、他のたくさんのお客さんのいる前で平気な顔をして進めている。こちらは恥ずかしいといったらありやしない。「見えます」と自信を持って言える人ならいい、こちらは見えないのだ、「見えません、分かりませ

ん」。それも他のたくさんのお客さんがいる手前、つい小さな声になってしまう。「マイクが無いので大きな声で言ってくれないと聞こえない!」。…出た・出た、これが役所用語だ。「それじゃあ、車を運転してはいけません」。そんな事ぐらい分かっている。人権無視とまでは言わないが、もう少しプライバシーを尊重したデリカシーのある方法はないものか。